

# かがやき

No.36(2017.12.5 刊行)、広報委員会編集  
県立図書館発行  
禁複写転載©広報委員会

## 特別企画 ボランティア論

### 企画にあたり

広報グループ 桜井 淳

広報グループは、茨城県立図書館ボランティアだけでなく、水戸市の代表的な組織、具体的には、水戸キリストの教会、水戸芸術館、茨城県近代美術館のボランティアについても、定点観測を実施している。良い点は積極的に取り入れたいと考えている。

水戸芸術館は、演劇、美術、音楽の三部門を備えているが、国内だけでなく、世界を見回しても、三部門そろっている芸術館は、極めて少なく、世界トップクラスと位置づけられている。

水戸キリストの教会は、米プロテスタント系教会(Church of Christ)であり、地方の教会としては、規模と質からして、日本でもトップクラスに位置づけられている。日曜礼拝者の半数は、米国から日本に来ているAET(Assistant English Teacher)である。

そのため、牧師は、日本語の説教に続き、まったく同じ内容を英語で話す。

私は、東大大学院人文社会系研究科で中世ユダヤ思想の研究をしていたため、『旧約聖書』は、くり返し、熟読していた。宗教学(年代順に、ユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教、イスラーム)と宗教社会学も研究していた。そのため、2013年4月から、水戸キリストの教会の日曜礼拝に参加するだけでなく、牧師や執事から聞き取り調査も実施している。我々は他組織の他分野のボランティアからも学ばなければならない。

牧師は、究極の聖職であり、ボランティアでもある。そのため、牧師は、どのようなことをしているのか、方針と目的は、何なのかを執筆していただいた。

### 牧師としてのやりがい

水戸キリストの教会牧師

恒枝篤史

私は水戸キリストの教会の牧師、と言っても、キリスト教会は、世襲制ではなく、39歳まで、東京で、ビジネスマンをしてきた。そのまま企業人としての道を貫くこともできたが、自分の命をどう使うのか、天命について考えさせられた。まるで磁石に引っ張られるかのように、その思いと使命感が心を満たし、39歳で、献身を決意した。会社を辞め、アメリカの大学院の神学部で学ぶため、家族と共にアメリカへ渡り、3年間、そこで勉強した。修士号を取得してから、東京都立川のキリストの教会へ戻り、牧師に就任し、現在、水戸キリストの教会で

牧師をしている。

### トマトの話

私にとっての生きがいは人を育てることである。みなで信じ、ふさわしい環境を整えれば、人はどこまでも伸び、輝き、驚くほど、大きな仕事ができるはずと信じているからである。

私の大好きな話で、トマトの話がある。大きなハウスの中で、まず、種のために大きな水槽を用意する。そこに栄養分たっぷりの水を張る。温度も光の具合もちょうど良くしておく。すると、根が出て、増えて、水槽の中いっぱいになるほど伸びる。

そしてそのトマトは、根から十分に栄養を吸い取って、太くなって、葡萄棚のようなところに、枝を広げて好きなだけ伸ばしてやると、枝分かれし、ぐんぐん伸びて、なんとそこに、合計 13000 個のトマトが実った、ひとつの種から。

奇跡のような話だが、実は、種の中に、その力が既にあるってことに驚かされませんか。どんな種でも、無限の力が宿っている、それを信じて種にとってのストレスを除いて育てれば、無限の力を発揮する。つまり、種には初めから可能性が十分にある、それを信じてストレスなく、伸び伸び育てれば、どこまでも伸びていく、と言うことである。実りの多い少ないは種のせいではない。信じて、ふさわしい環境を整えたかどうか、そういうことである。

この話は、自信を失いがちな私達に元気を与えてくれるのではないか。神様は、初めから、私達に力を与えてくださっている。育つのに、必要な光、水、土、栄養も、すべて注いでくださっている。後は、



水戸キリストの教会（2013.10.11 日曜礼拝。右側が恒枝篤史牧師。恒枝牧師は、聖書解釈、教え方、表現(英語力)、説得力において、特に、優秀。恒枝牧師は、1966 生まれ、神戸市立外大卒、米アビリン・クリスチャン大大学院組織人材修士課程修了、東京で 10 年間の会社勤務後、同大大学院牧会学修士課程修了。東京都立川を経て水戸へ。2013.10.11、桜井撮影）

信じて働くだけ。信じなければ、芽吹かない、伸びない、種のままである。でも、みなで信じて、ふさわしい環境を整えれば、人はどこまでも伸びて、驚くほど大きな仕事ができるのである。

人を導く役割の意味をたどっていくと、相手に内在する能力を引き出す支援者と言うとらえ方ができる。できない状態からできる状態に変わるには、本人が持っている力に気づき、それを発揮できるようにしてあげれば良い。相手を受け入れる。相手が持っている可能性を信じてすべての答えは相手の中にあると信じてあげる。自分で答えを見つけることができることを望む。そして、適切な支援で能力を開花させることが大事である。

孤立の時代？

私の子供の通っている小学校の保護者会

で、ある問題が取り上げられた。その問題とは、友達との遊び方についてであった。みな、友達の家へ遊びに行き、何をして遊ぶか。みんな、シーンとした中で、それぞれのゲームで遊んでいる。同じ場所にいるというだけで、会話をし、いっしょに、遊びをしているわけではない。みんな何も言わず、黙々と、ゲームをしているのである。

こういった社会のあり方が、人を孤独に追いやり、様々な問題の源になっているように思える。そのような中で私達は、温かい空間、自分が受け入れてもらえる場所、「自分がいていいのだ、自分が必要とされている」と感じられる場所、自分が安心して属することのできるコミュニティに飢え渴いているということはないか。

確かに、技術が進んで、私たちの生活は、昔からは想像もつかないほど、すべてが便利で豊かになった。お店にはモノが溢れている。

Web やスマホも普及してきた。その反面、家庭や一人ひとは、孤立しているということはないか。どうして、私たちは、孤独に感じるのか。たとえ、大きな町に住んでいたとしても、たとえ成功した会社で働いていたとしても、携帯電話やスマホで結びついていても、そういう孤立を感じる方は、多数、いるのではないか。お互いの顔や名前を知っていることが、問題なのではなく、誰にも知られていないことが問題。

心の奥深くで、私達は、とてつもなく孤独で、とてつもなく寂しい。たましいの奥深くで、私達は、誰かに知ってほしい、誰かに愛されたいと叫んでいるのではないか。そのような中で、私達は、現代社会にあって、温かい空間、自分が受け入れてもらえる場所、自分がいていいのだ、自分が必要とされている

と感じられる場所、自分が安心して属することのできるコミュニティに飢え渴いているということはないか。

#### 地域に根ざした教会を目指して

私達の教会には、日曜礼拝に、毎週欠かさず、新しい訪問者の方々が近くから来る。信徒の方だけでなく、多数の未信者の方々が足を運び、様々な活動に携わっている。月に2回、日曜日の午後には、水戸市のAET(Assistant English Teacher)の先生達が、ネイティブスピーカーとして、ボランティアとして、英語で聖書を教えている。地域の方々の反響が良く、地域の子供達が約35名、中高校生から大人まで、約40名の方々が参加した。空手クラスも、地域の子供達の体と心のために、月2回、教えている。これも空手有段者のボランティアによる働きである。いまは約15-20名で稽古に励んでいる。日本語クラスもある。外国人のAETの先生達のために、日本語を週に二度、ボランティアの方々が教えている。

毎月第二土曜日に行っているホームレス支援活動では、2013年から、水戸市内のパン屋「きんのすず」からパンをいただくようになった。牛久市にある「フードバンク茨城」から食料をいただき、お土産として配っている。食品とパンの総量は、100kgにもなり、フードバンクからいただくようになる前には2kgしか配れなかった土産が、いただくようになってからは、一人当たり6kgになった。

時々、空腹で困りきった方が教会に来ますが、フードバンクからいただいたレトル

トのご飯や缶詰・おかゆ・保存のきく食品を食べて頂き、助かっている。2009年からカトリック水戸教会福祉部の皆様の協力をいただくようになり、今日まで変わることのない信頼関係を築き、素晴らしい仲間として、この活動を支えている。神様のお導きにより出合わせていただいた

「もったいないをありがとうに」という合言葉のフードバンクのご支援と、毎回、20-30人の教会内外の素晴らしい仲間達のボランティアによる協力の下で、水戸市内のお腹を空かせた方々の食事の支援を続けていくことができればという願いがある。

他にも、年に3回、教会内外の方々を連れて、チームで、カンボジアのシェムリアップへ向かう。すべて自費での参加である。2008年より始まった英語を学べるようにとの子供達への支援である。最初は、3人のストリートチルドレン達から始まり、最終的には、14人の子供達の教育支援を行うに至った。支援内容は、教科書、学校までの交通費、制服、学費などの支援である。

私達は、今も、なお、その生徒達への支援を続ける一方、開校したバンヤンコミュニティースクール(BCS)をとおし、その他の人達への支援も始めた。現在、約200名の生徒達がBCSに通っているが、生徒達の授業料、交通費、教師とスタッフの給与、運営費など、すべて、そのために捧げた私達の献金で賄っている。

カンボジアの状況を変えるために必要なのは、これからのカンボジアを作り上げてゆく子供達が、過去の忌まわしい歴史、それから影響される厳しい今をたくましく生き、カンボジアを変える人間になるよう育てていくことだと、私達は信じている。子供たち

の学力、道徳や人格の形成につながるような教育をしていけば、彼らの生活の向上につながる。将来、そのような子供達が増えれば、彼らが大人になった時に、自分達の国のために働く、リーダーとなる人材が現れるようになるはずだと信じている。

最近では、20代から30代の若者達が、多く教会に集うようになり、ますます活気づいている。いろいろなことで疲れた時、本当に心からいっしょにいることは素晴らしいと感じられる場所。お互いに成長することを目指し、励まし合い、成長できる場所。本当に家族として自由に交わり、自由にお互いを受け入れて、誰もが元気をもらって出て行く場所。そのシンボルとして隠れていた、非常に閉ざされた空間だった壁を壊し、コミュニティの場を作る。そこにはあらゆる可能性がある、そこでは誰もが受け入れられるというような場。そういうコミュニティが、少しずつできてきたように思う。

### 隠された宝

種はあらゆる可能性を秘めている。キリスト教会と言うと何か敷居の高い閉ざされたイメージを持つ方も多いと思う。私達の教会も、隠されたままで、壁を破らずにいたとしたら、どうだったか。種のまま、何も起こらなかったはずである。教会で語られる聖書の言葉、福音(良い知らせ)。神様のしておられる沢山の素晴らしい働き。隠れたままだと、種のまま何も起こらない。

聖書の中で、イエス様は、「天の国は、畑に隠された宝のようなものですよ、高価な真珠のようなものですよ、それを見つけた

ら、他の物をすべて売ってでも手に入れるようなものなのですよ」と言っておられる。すばらしい仲間達と、心をひとつにして小さなコミュニティを作って、感謝、賛美、分かち合い、いっしょに遊び、いっしょに祈って、素晴らしい私達の神様を礼拝する。最高の宝、それは、既に、ここにあるではないか、そう思う。仲間達といっしょに共に神に触れるひと時。それは、ほんのひと時、ほんの小さな出来事のようにいて小さな天国である。最高の宝、それは、もう、既に、ここにある。この宝だけは手放すまい。この宝のために奉仕したい。この宝をみんなにも分かち合いたい。それが、私の牧師としての生きがいである。

現代に生きるたくさんの人達が、今、孤独を感じ、その中であえいでいる。人生のギャップ、疑問、問題、孤独、……。たくさんの人が、生涯続く愛を求めている。たくさんの人が、本物の愛を体験したいと思っている。また、何かに貢献したい。意味のある働きのためなら、惜しみなく働きたい。そう願っているのではないか。

神様があらゆる人に必ず与えて下さっている尊い可能性がある。それが眠ったまま発揮されないことほど、残念なことはない。私達もお互いに成長するためには、その人の中の可能性を信じ、その人に秘められた可能性を見つけ、花開かせて、喜びとする。側面から人を助け、励まし、力づけていく交わりが必要不可欠なのではないか。

### 編集後記

本号の内容は、殊の外、バラエティに富

み、読み応えがあると思います。

恒枝篤史牧師(カトリック系は神父、プロテスタント系は牧師)のオリジナルな執筆原稿は、5ページもの長さであり、聖職者であるがゆえに、殊の外、ていねいな表現で、いたるところに謙遜表現が入っており、非常に、格調高く感じられました。国の土台となる人材を育てたいという熱意が強く感じられる文章でした。

本当は、そのまま、全文を掲載したかったのですが、通信紙No.30, 34と比較すると、長さや文章表現において、整合性が失われてしまいます。そのため、やむをえず、編集により、3.5ページに縮め、なおかつ、市民感覚との乖離が生じないように、編集者の裁量範囲内で、全体の約30%にわたり、論理展開と文章表現を修正しました。格調高さが失われていないことを祈りたい。

恒枝牧師は、人格者であり、例を見ないほど優秀です。本人が目指しているかどうか知りませんが、将来、どこかの大学の神学部教授に収まる人材です。

H27-29年度に編集したNo.25-36において、特に、注意したことは、記事の「オリジナリティ」「文章表現」「論理展開」でした。

依頼原稿は、そのまま掲載できず、文章論の教科書と自身の経験に則り、少ない場合でも、全体の約10%、普通、約30%も修正します(考え方についてはNo.31参照)。注意深く編集したものの、満足できるものは、ひとつもありませんでしたが、相対的には、No.27, 30, 31, 33, 34, 35, 36 良いと思います。

日記や組織内の配布資料であれば、「オリジナリティ」「文章表現」「論理展開」に、注意する必要は、ありませんが、茨城県立図書

館 HP のような社会に公開されるものについては、組織と執筆者と編集者が、世の中で、恥をかかないレベルにしておかなければなりません。

私は、20 歳台半ばから、文章修行を行い、30 歳で英文翻訳出版、30 歳台では、毎年数編の月刊誌特集論文などの執筆、42 歳から、国内外に毎年約 100 編の新聞文化欄や月刊誌特集論文などの執筆(流行作家並み)、42 歳から今日まで、学術書や啓蒙書など単著 33 冊(単著・翻訳・共著・編集・監修含め 75 冊)のまとめをしたため(県立図書館では単著 23 冊が閲覧可能)、文章の「オリジナリティ」「文章表現」「論理展開」には、特に、注意しており、通信紙においても、容赦なく、徹底的に厳しく対応しています。

文章については、自身のことだけではなく、仕事上の関係者にも留意してきました。これまで、後に、芥川賞や直木賞などを受賞した思い出に残るふたりの編集者とのやり取りがありました。

ひとは、書評紙『図書新聞』の私の連載欄「科学時評」を編集した藤沢周さんです。彼は、後に、『ブエノスアイレス午前零時』で、芥川賞を受賞(1998)しました。

もうひとは、月刊誌『諸君!』『文藝春秋』などでお世話になった白石一文さんです。彼は、『ほかならぬ人へ』で、直木賞を受賞(2010)しました。彼の父親の白石一郎さんは、時代小説を執筆する直木賞作家です。親子で直木賞を受賞した例は彼らだけです。

白石一文さんの作品は男女の心の機微や優しさを独自の視点や哲学(ショーペンハウアーやトルストイなど)を基に表現したものです(他にも、『惑う朝』すばる文学賞 1992、『この胸に深く突き刺さる矢を抜け』

山本周五郎賞 2009 など 22 冊)。その優しさは、生まれつきのものなのか、それとも、人生における出逢いや別れに起因するものなのか、彼の作品を読み終え、いつも、思いを巡らせています。

私は、彼に、「作品には、これまでの人生の出来事が 30%くらい含まれていますか」と質問したところ、「80%くらい」と。その時、作家というのは、良いことも良くないことも、特に、不幸なことも、すべて、さらけ出せなければ、なれないと痛感しました。

一流の小説家が、新聞文化欄に執筆したエッセーは、素晴らしく、「オリジナリティ」「文章表現」「論理展開」がしっかりしているだけでなく、読みやすく、それでもって、躍動し、光を放っています。とても、及びません。未熟を恥じ、ただ、精進するのみです。

桜井 淳